

「カイラが教えてくれたこと」

洛南高等学校附属中学校 3 年 孫 宇佳

「今までありがとう。」悲しそうに笑って、私の友達は遠くへ行った。

小学三年生の夏休み明け、イスラム教徒の転校生が来た。彼女の名前はカイラ。いつも長袖の服を着て、頭に布を巻いていた。また、豚肉が食べられないので、一人だけお弁当を持ってきて食べていた。ラマダンという断食のときは別の教室で一人でお祈りをしていた。小学生の私には見たことのない生き方だった。知りたいことだらけだったので、沢山話しかけた。彼女は日本語があまり流暢ではないから、初めは会話をするのが難しかった。でも話してみると、とても明るくて面白い。見た目は日本人と違うけれど中身は普通の女の子だったから、すぐに仲良くなった。でも、少し経ったある日、教室でこんな声を聞いた。

「頭の布ダサい。」

「外国人怖いし嫌い。」

その日から彼女はいじめられた。仲間外れにされたり、無視されたりと、いじめはひどいものだった。やがてカイラは不登校になり、転校してしまった。

今思い返せば、小学三年生の子供が自分と違う人を理解するのは難しいことなのかもしれない。では、クラスメイトが大人だったとしたら、彼女を理解できただろうか。私は、確信をもって「はい」とは言えない。大人でもお互いの違いを受け入れることは難しいと思う。実際に、世界中のあちこちで争いが起こっている。だから、私は、相手の意見を聞き入れられるような広くてゆとりのある心を持つことが大切だと思う。誰一人同じ人間はいないことを知り、違いをお互いに認め、リスペクトする。この考えが広まれば、世界から差別や争いが減っていくと私は信じたい。

カイラと最後に公園で遊んでいたとき、カイラはこう言った。

「私だって人間なんだから、仲間に入れてほしかったな。」この言葉を聞いて、私はハッとした。私たち人間は一人一人違う。性格や能力、見た目など、違うところは様々である。でも、私たちは皆人間なのだ。全ての人に心があり、考えがあり、価値があることを気付かせてくれるような言葉だった。そして、他人と違うことを前向きに捉え、他人を尊重して生きていくことを私に教えてくれた。

今は、カイラがどこにいるのか私にも分からない。海の向こうにいるのかもしれない。でも、カイラと過ごした日々の中で感じたことは山ほどあり、新鮮な経験が出来たと思う。是非一度、違いを認める努力をして欲しい。何気ない日常が少しずつ変わっていくだろう。こうして、平和な世界が広まれば、私も、カイラも、嬉しいなと思う。